

《理論編》序章

子ども・コミュニティとその源流

菅野幸恵

ほどよいつながりのあるコミュニティ
自然の存在としての子ども

子育て、子育ての課題解決のカギは“農”！
ひととしての根っこが育つ乳幼児期
本書での「自然」のとらえかた



ほどよいつながりのある「コミュニティ

近年、「つながり」という言葉が多く語られるようになりました。阪神淡路大震災や東日本大震災、コロナ禍以降、人びとが自分の生活の足元を見直し、地方創生のために、地域おこしや、コミュニティ再生に力を入れる自治体も増えています。

コミュニティは日本語で言うと、共同体や地域社会のことです。コミュニティとは「何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」¹などとされます。似た言葉であるアソシエーション（組織）は、目的と理由を持って存在しています。たとえばオリンピックの組織委員会のように、存在すべき理由があるのです。それに対して、コミュニティは、理由なく存在し、持続していくものです。そこにいると自分の存在に納得できる、つまり自分の存在と切り離せないような集まり²が、コミュニティであると言えます。

かつての農村共同体は都市化のなかで地域や自然から切り離され、都市では「カイシャ」や「核家族」といった閉鎖性の強いコミュニティが築かれた³と言われます。農村共同体では生活に必要な生産をコミュニティのなかで行っていましたが、都市では生産と生活が切り離され、生産を誰かにお金を介して任せることになります。誰かがしてくれるのは楽だし便利です。ただカイシャや家族の利益が優先される社会では、人びとのつながりは薄れていき、個人の孤立を招くことになりました。

1 『コミュニティを問い直す』

広井良典（ちくま新書）11頁

2 『共同体の基礎理論』内山節
（農文協）82頁

3 広井 同掲書9頁



一方、かつての共同体は、人びとをしるものでもあったのです。近代化をめざす流れにおいて、「共同体」は封建的で、人びとの自由を奪うものであり、解体すべき対象となりました。ところが、近代化の負の部分が見え始めると流れが変わっていきます。自然や労働などについて独自の思想を展開する哲学者の内山節さん⁵は、「人間と自然の関係を問い直そう」という問題意識が生まれると、自然と人間が結びなおし、人間と人間が結びなおしていく社会のありかたを共同体としてとらえていくようになった⁴と、指摘。つながりが強すぎてしがらみのようになってしまうコミュニティではなく、つながりがなさすぎるのでもなく「いいあんばいのつながり」⁵のあるコミュニティが求められているのだと思います。

また内山さんは、日本の共同体の特徴として、自治力の高さを挙げます⁶。武士が都市に移動した江戸時代、幕府は農村を支配しようとしたが、農民は表向きは従いながらも、さまざまな方法（たとえば隠し田）を駆使して、自分たちの世界を守ろうとしていたそうです。誰かに任せっぱなしにするのではなく、自分たちのことは自分たちで考えていく。そんな姿勢が、これからのコミュニティを考えていくうえで重要です。

新たなコミュニティのあり方を考えていくときに、キーワードになるのが「子ども」です。「子どもと高齢者は地域への土着性が高い」⁷という指摘は大いにうなずけます。子どもや高齢者が生き活きとしている地域は、みんなが生き活きとできます。本書では、「昔はよかった」という素朴な回顧主義に陥らずに、さまざまな実践から新たなコミュニティのかたちを示していきたいと思っています。

4 内山 同掲書28頁

5 『コミュニティデザインの時代』山崎亮（中公新書）11頁

6 内山 同掲書91頁

7 広井 同掲書19頁

自然の存在としての子ども

「子育ての場合は、おとなの文化が子どもの自然に出会う境界だ」⁸と、子育てや子育ての本質を問いつける発達心理学者、浜田寿美男^{はまたすみお}さんは述べています。子どもは自然の存在であり、自ずから育つ力をもっています。「7つまでは神のうち」ということわざは、神様に頼むほかない領域である自然の営みのなかに、子どもがいることを示しているでしょう。江戸時代の育児書では、たびたび子どもの育つ様子が植物にたとえられていたそうです。そのため日本の伝統的子育て観は、植物（農作物）を育てることのアナロジーでとらえられていたのではないかといわれます⁹。子どもは授かりもの。その育ちは周りがあれこれ手を加えてどうなるものではなく、熟す時がくるのをゆっくり待つほかない。このような子育て観は、地域の共同体（コミュニティ）のなかで共有されてきました。一方で、今の社会は、その共有も難しく、暮らしや目の前の子どもから切り離された形で届いた情報ばかりがあふれています。大量の情報は子どもたちの将来を人質にとり、育てる者をもみこもうとします。ひとつ情報に触れるとあれもやったほうが、これもやったほうが気になって、どんどん足していくことになってしまうのです。そこでは、育つ子どもへの基本的信頼が失われて¹⁰います。

自然の存在である子どもを育てる営みには、不安はつきもの。周囲と育ち方が少しでも違っていると、自分の育て方が悪いのかなと思ってしまいがちです。かつては子育ての責任は養育者だけが背負うものではなく、育てる者の不安を共同体のメンバーが受け止め和らげていました。で

8 『子どもという自然』と出会う『浜田寿美男（ミネルヴァ書房） 6頁

9 『子育ての社会史』横山浩司（勁草書房） 186頁

10 横山 同掲書187頁



も今は、なにかあると養育者だけがその責任を問われるので、育てる者は周りの目を気にしてびくびくしながら子育てせざるをえなくなります。その結果、周囲の目を気にするあまり、子どもの自然を待てず子どもの行動を制限し、管理するという悪循環が生まれてしまうのです。

子育て、子育ての課題解決のカギは「農」!?

私はここ10年ほど、自主保育や青空保育での子どもの育ちや、そこでの大人同士の関係性を追いかけてきました。四章で詳しく取り上げますが自主保育とは、就学前の乳幼児を親たちが交代で預かり合う保育活動のことです。

2010年に茨城大学で開催された「農と心理学」¹¹のシンポジウムに参加したときのこと。

お話を聞いているうちに「自主保育ってまさに「農」じゃん!」とビビッときて、気づけば企画者の石井宏典さん¹²に熱く語っていました。というのも、シンポジウムでは、農という営みを「移動と定住」「消費と生産」「人工と自然」という3つの軸から考え、現代人の生活は、「移動」「消費」「人工」へと傾斜してきたと指摘。多くの人が職を求め都市に向かい、生活に必要なものはサラリーから買い求め、人工的に管理された環境で暮らすようになったという話が展開されていたからです。

このような「農的営み」から「都市的生活」への変化によって、私たちは自然や地域から切り離されるようになりました。その結果、1章から3章で述べるように子育てや子育てのかたちは大きく変わり、さまざまな課題が生まれます。子どもが育つ、子どもを育てる(つまると



写真序-1 大人も子どもも畑で

11 日本質的心理学会第七回大会の企画のひとつ

12 社会心理学者。沖縄県本部町備瀬を中心としたフィールドワークを30年以上続けている。

ころ人が生きる) 営みは、元来「自然」のものです。ヒトの子育ての特徴は共同繁殖にあるといわれます。そのため母親、父親だけではなく、きょうだい、おじおば、祖父母などが子育てに関わってきました。子どもという自然に対してみんなで協力しながら関わってきたのです。そのあり方はまさに「農的」ではないでしょうか。

ちなみに自主保育は、自分の子であろうとなかろうと、みんなでわいわいがやがやしながら育てようとする「ゆるやかさ」と「濃い人間関係」のある営みです。このシンポジウムには、なんとなくアナーキーな匂いのするタイトルに惹かれて参加したのですが、この日をきっかけに、私は「農」と子育てを結びつけて考えるようになりました。

ここという「農」とは単純に農業という業種や¹³、自然志向の生活だけを指すものではなく、私たちの暮らしの足元を見つめ直す意味でも使っています。そもそも、農業とは、その地域の自然体形を上手く利用していく営み¹⁴のことです。その実現のために人間同士の助け合う関係がありました(たとえば結などの協同労働)。そのような人間関係を支えるために、暮らしの場である家は、生活の場であり、仕事場にもなり、近所の人が来れば接客の場になっていたのです。人びとが互いに助け合いながら自然と付き合っていくところに、農という営みの本質があるのではないかと思います。

現代の子育ちや子育てをめぐるさまざまな課題の根本のひとつは、子育ちや子育てが「自然」や「地域」から離れてしまったことにあるのではないかと考えます。そして、本書で取り上げる自主保育、青空保育、森のようちえん、冒険遊び場には、「子ども」「自然」「農」という3つのキーワードを実現し、現代の子育ちや子育てをめぐる課題を解決するためのヒントがある



写真序ー2 田んぼで作業

¹³ むしろ効率を重視する大規模農業は「農的」ではないと思います。

¹⁴ 『農の営みから』内山節(農文協) 36頁



のではないかと思うのです。

ひとつとしての根っこが育つ乳幼児期

最後に、本書では「子ども」をテーマにする時、主に就学前の子どもの育ち・育てに注目して述べていることをお伝えします。乳幼児期はひとつとしての根っこが育つ大事な時期です。根っことして育てたいのは、「わたしが好き」（自己肯定感）と「わたしは○○が好き」（のちの知的好奇心につながるもの）という感覚です。その育ちは、目に見えるものとしては表れにくいものですが、しっかりと根っこが張っていれば、ちよつとやそつこのことでは倒れない幹が育ちますし、たとえ倒れてもまた芽が生えてきます。自己肯定感「○○ができる（できない）から」という条件付きではなく、自分の存在をまるごと受け止めてもらうことで育まれるもの。またしっかりと遊びこむことでも「わたしが好き」「○○が好き」という感覚が育ちます。本書で取り上げる実践は、この根っこを育てる土のようなものです。そこで、発達心理学の視点も織り交ぜて、コミュニティに必要な要素である「子ども」が育つこと、またその「子ども」を育てることについて論考していきたいと思います。

本書での「自然」のとらえかた

●自然の意味を調べると、「人為が加わらない」ということが含まれる定義を目にします。環境社会学者の宮内泰介さんは、自然について考える際、人間と切り離された形で自然を考えるのではなく、自然と人間の関係はどうだったかをふまえる必要がある*と指摘。その例として、里山など日本列島の多様な植生が人間活動とのかかわりで成り立っていることが挙げられます。

●「自然」が「nature」の意味で使われるようになったのは、明治の終わりになってからだそうです。それまで、自然はジネンと読まれるのが一般的で、「おのずからそうなっている」とか「あるがまま」という意味で使われていました。それが「nature」の訳語となったのは、日本人にとって山川草木はおのずからそこにあるものとしてとらえられていたからではないでしょうか。

●本書では天体、山川海草木、動物など人間社会を取り巻く環境としての「シゼン」と、人間を含んだこの世にあるものを創り出した大きな働き、人間の意志によって防ぐことのできないものごとの成り行き「ジネン」の双方を含むものとして「自然」をとらえます。

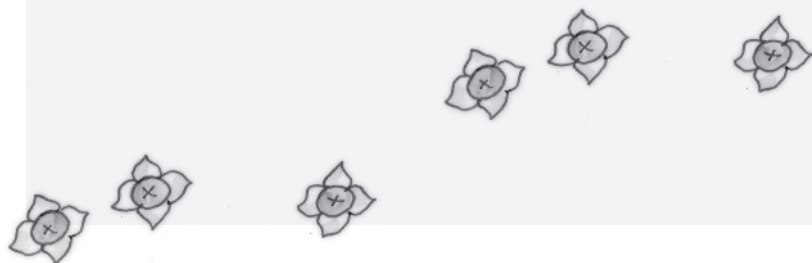
*『歩く、見る、聞く 人びとの自然再生』宮内泰介（岩波新書）64頁

《理論編》 1章

子育てはひとりではできない

菅野幸恵

アウェイ育児とは
コペルニクスの転回
子育てのつらさはどこから
子育て支援の主役はだれ？
子育ての私事化
ワンオペとイクメン



アウェイ育児とは

神奈川県川崎市の外遊びグループに参加している方たちを対象にお話をしたときのこと。ふと思いついて、その場にいた20名弱のお母さんたちに「この中で川崎が地元の方はいらっしゃいますか」と尋ねてみたところ、手を挙げた方はゼロ。全員が別の地域で生まれ育った方でした。そんな生まれ育った地域以外での子育てを「アウェイ育児」と名付け、地域でのつながりを十分に持てず孤立した子育てに悩む親の存在を指摘したのは、NPO法人子育てひろば全国連絡協議会が行った調査¹です。地域子育て支援拠点²を利用している母親1、175人の回答をまとめたこの調査では、「自分の育った市区町村以外で子育てする母親」は7割超え。近所で子どもを預かってくれる人はいるかという問いには、自分の育った市区町村（ホーム）で子育てしている母親の7割近くが「いる」と答えているのに対して、自分の育った市区町村以外（アウェイ）で子育てをしている母親は「いない」が7割と対照的な回答でした（図1-1、図1-2）。

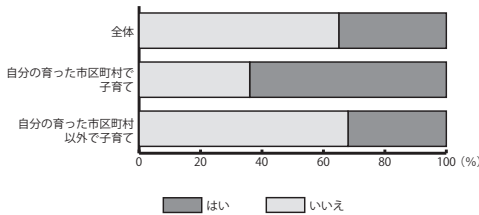


図1-2 近所で子どもを預かってくれる人はいますか？
（出典：NPO法人子育て広場全国連絡協議会『地域子育て支援事業に関するアンケート調査2015』）

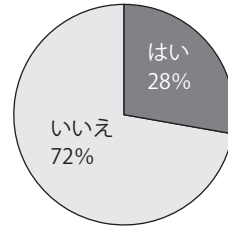


図1-1 あなたが育った市区町村で、現在育児をしていますか？（出典：NPO法人子育て広場全国連絡協議会『地域子育て支援事業に関するアンケート調査2015』）

1 『地域子育て支援事業に関するアンケート調査2015』
NPO法人子育て広場全国連絡協議会

2 ①子育て中の親子の交流の場の提供と交流の促進②子育て等に関する相談、援助の実施③地域の子育て関連情報の提供④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施。令和3年度は7、856か所で実施されています。親子と地域を結びつける架け橋のような存在として機能することが期待されている場所です。



この「アウェイ育児」は最近の現象ではありません。戦後、農的暮らしから都市的生活への移行を遂げていくなかで、日本の家族のありようは大きく変わりました。第一次産業が中心の頃は、自宅と職場である田畑は近い距離にあり、多世代が同居・同居する大家族が大半だったのです。しかし、その後多くの人が都市に移動し、サラリーマンとして働くようになったことで、郊外の自宅から都心の職場に通うようになり、核家族が増えていきます。それまで、自分の生まれ育ったホームで、地縁、血縁を中心に行われていた子育ては、見ず知らずの人ばかりのアウェイで行われるようになりました。

地縁、血縁を中心としたコミュニティにおける子育てには、子どもからお年寄りまでさまざまな世代の人が参加します。年長の子どもは年少の子どもの面倒をみたり、遊んだりすることによって子育ての周辺の仕事を担っていました。青年期になると子育てに関わる言い伝えやタブーに触れるなど、責任の重い世話も担うようになります。その先に自分が親になるプロセスがあったのです（図1-3）。都市的な生活に移行していくなかで、少産少子化が進むと、自分の子どもをもつまで新生児を抱くどころか見たこともない状態で、親という責任の重い役割を担う人が増えます。もちろん、両親学級等で新生児大の人形を使って沐浴の練習をしたり、親になる心構えや子どもについての知識をレクチャーされたりする機会がありますが、首の座っていない赤ちゃんの抱きにくさや、新生児特有の泣き声に触れる経験がないまま親になることは、困難をもたらすでしょう。

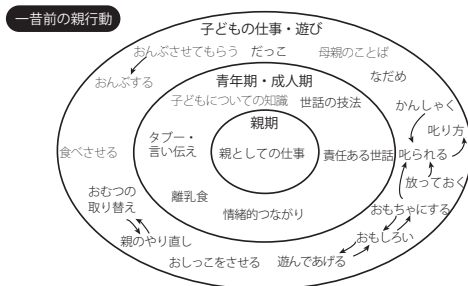


図1-3 ひと昔前の親行動（出典：氏家達夫「親業見習い中」『発達』73 ミネルヴァ書房 53頁）

コペルニクスの転回

「子供ができた瞬間、それまでの自我や世界観はバリバリと音を立ててひび割れを起こし、《私》はいったんスクラップされてリビルドされる」³探検家の角幡唯介^{かくはた ゆいけい}さんが、第一子誕生の際に感じたことを言葉にした一節です。また、育てられる者から育てる者になっていくプロセスは《コペルニクスの転回》と言っても過言ではないほどの生き方の一大転換だ⁴という指摘も。地縁・血縁を中心としたコミュニティのなかで子育てが行われていた時代、前述したように育てられる者から育てる者への移行は、比較的ゆるやかになされていたはず。角幡さんが感じた大転換は、都市化が進んだ結果もたらされたものであると言えるでしょう。都市的生活は便利さや効率が重視されます。子育てとは、効率とは正反対の営みです。便利で効率的な生活を享受したひとたちにとって、親になることは、それまでの生き方を180度変えるようなものかもしれません。

子育てのつらさはどこから

日本では、1970年代に「母子心中⁵」という社会現象を通して、子育て中の母親が抱える困難、負担、不安が注目を浴びるようになります。母子心中は大正や昭和初期にも見られましたが、当時の心中は貧困が主な原因でした。一方、70年代に頻発した心中の原因は育児に閉

3 『探検家とベネロベちゃん』

角幡唯介（幻冬舎文庫）53頁

4 『育てる者から育てられる者へ』鯨岡峻（日本放送協会）39頁

5 心中の本来の意味は、この世で添い遂げられない2人があの世で一緒にいるように一緒に死を選ぶことです。その意味で親子心中は本来の心中ではなく、子どもの殺人+親の自殺なのですが、日本では親子心中という扱われ方をします。



塞し、精神が不安定になる育児ノイローゼにあるとされ、今までは違うタイプの心中であることが注目されたのです。当時はコインロッカーベイビー事件⁶などをきっかけに、母性の喪失が嘆かれた時代。そこで「育児もできないなんて母親失格」という侮蔑的な意味合いを込めて、育児ノイローゼという言葉が使われました。そのため、母親たちの閉塞感というものは、母親の育児に対する理解が不十分であったり、母親が人間的に未熟だったりすることで生じる、母親個人の資質の問題として片付けられていました⁷。

1980年代になると、ようやく多くの母親が不安や不満を抱えていることが指摘されます。育児不安の背景には、夫の育児不参加や、家族以外のサポートの少なさなどの要因がある。母親たちの感じる閉塞感⁸は、個人の問題ではなく、社会的な問題であると考えられるようになったのです。

それに呼応するように、今という「子育て支援」の芽がまずは地域で生まれます。東京都江東区にある神愛保育園⁹では、電話相談を通して地域で孤独に子育てしている母親の存在に気づき、母親たちが集う場所として園の一部を開放しました⁸。1993年のことです。神愛保育園のように地域で始まった子育て支援は、孤立した子育てに悩む母親の声を子育て現場の人たちがキャッチして始まったものです。対照的に、国の施策としての子育て支援は、少子化対策としてはじまりました。1994年に策定された「エンゼルプラン」は、主に出生率の低下を食い止めることを目的とした子育て支援策です。その後、1999年により幅広い支援を盛り込んだ「新エンゼルプラン」が実施されましたが、少子化の歯止めにはならず、2004年に「子ども・子育て応援プラン」が策定。このプランによって、地域子育て支援センターの設置

6 鉄道駅などに設置されているコインロッカーに新生児が遺棄される事件。日本では1973年前後に相次ぎました。

7 『あたりまえの親子関係に気づくエピソード65』 菅野幸恵（新曜社）20—22頁

8 「保育園で井戸端会議を」 中林節子『発達』72（ミネルヴァ書房）38—42頁

など地域における子育て支援体制が強化されるようになりました。

子育て支援の主役はだれ？

子育て支援というしくみは、支援する側とされる側という関係を作り出します。つまり、親などの養育者を支援が必要な「困っている人」と位置づけることにつながるのです。このようなサービスを提供する人と受ける人がいる図式は、養育者を受け身にしてしまうと指摘されています⁹。また、養育者側も「サービスしてもらうのが当然」という態度になり、子育て支援の充実とともに、自主的な活動が弱体化するという皮肉な状況も生み出しかねません。本来の子育て支援は、主体的に子育てするひとをサポートするものであるはず¹⁰。もし育てる側の「私が考える」という姿勢を奪っているとしたら、本末転倒な話になってしまいます。

子育ての私事化

ヒトの子育ての特徴は、母親だけではなく血縁・非血縁の仲間とともに行うところにあると言われます¹¹。しかし、アウェイ育児は、“群れ”で行われていた子育てを養育者だけで行う状況です。それは、今まで地域の人々によって担われていた子育ての責任が、養育者だけに丸投げされる事態にもつながります。かつては子どもが何か「いけないこと」をしていれば、親ではなくても「ダメでしょ」と声をかけるのが自然で、親は何をしているんだと非難されるこ

9 「子育て支援による母親の心理的変化―母親を主体にした援助の検証」尾崎康子『家庭教育研究所紀要』25巻38―50頁

10 その点でニュージーランドで生まれた子育て支援「プレイセンター」は親の主体性を尊重する試みで興味深いです。

11 「生態学からみる結婚と子育てと家族―共同繁殖で育まれる「共感する心」と「子育ての幸せ感」」長谷川真理子『政策オビニオン』NO. 23（一般社団法人平和政策研究所）



とはありませんでした。というのも、子どもの迷惑は、お互い様のこととして受容されていた¹²からです。一方で現在は、子どもが何か「いけないこと」をすると、親の責任だけが問われます。子育ては社会（公）ではなく、家族（私）の役割になるのです。混雑した電車で子どもが泣いて泣き止まないとき、車内には冷たい空気が流れます。その空気を感じて小さくなる親の姿を見ると、いたたまれなくなります。そんなプレッシャーがあると、「誰にも迷惑をかけるようにと我が子を見張る」という子育てをしてしまいかねません。

NPO法人フリースペースたまりばの理事長である西野博之さんは、現代の子育ての問題は「過干渉¹³」と「ネグレクト」だと指摘¹⁴しています。自分の責任を追及されるのを恐れるあまりに過干渉になってしまう親と、自分の子どもなんだから自分の好きにしたいという親の両極端な状態が見られるのです。後者は、子どもがいけないことをしていても注意しないのは私の勝手だし、他の人にとにかくいわれたくないという心情から生まれるようです。これらの両極端な親の背景には、子育てが親だけに任されたことの負の側面が共通してあると思います。近年では、「子どもの商品化¹⁵」という今の子育ての問題を指摘するセンセーショナルなことも登場しました。子どもに手やお金をかけ、「私の作品」として世に出そうとしている親の姿を指していますが、それも私事化の表れと言えるでしょう。

あふれる情報のなかで、どうすればいいかわからなくなることもあるでしょう。いわゆる「モンスターペアレント」も、私事化が生み出した現代の問題です。モンスターペアレントと呼ばれる人たちは、孤立して社会とどうかわつていけばいいか、苦しみもがいている人たちではないか¹⁶という指摘も。孤立した結果、自分の価値と社会の価値が切り離され、自分の価

12 「子ども親の再生産のプロセスと子どもの居場所」 柳父立一「子ども、若者と社会教育」日本社会教育学会編（東洋館出版社）101頁

13 過干渉とは、子どもは望んでいないことをやらせすぎることです。親が望んでいることをさせたり、子どもが自分でする気持ちになる前に、やらせてしまうなど、大人が子どもをコントロールすることです。一方過保護は子どもが望むことを叶えることとして区別します。

14 青山学院女子短期大学の授業（いのちとケアの人間学）にて、2018年11月12日。

15 『やりすぎ教育』武田信子 永井社 41頁

16 「悪い子」とはどのような子どものか 麻生武『発達』127（ニネルヴァ書房）8頁

価値観を社会のほうに押し付けるという事態になっているのではないのでしょうか。

ワンオペとイクメン

アウェイ育児と並んで現在の育児を表現する「ワンオペ」というワード。「ワンオペレーション」の略で、1人の従業員がすべての業務を担うことを意味します。もともとはファストフード店やコンビニエンスストアでの過酷な労働状況を指していましたが、育児についても使われるようになりました。ワンオペとは、夫婦のどちらか一方がひとりで子どもの世話を引き受けている状態を指します。どちらが担っているのか、図1―4を見てみましょう。6歳未満の子どものいる夫婦の家事育児時間を示したものです。圧倒的に妻（母親）の時間が長いことがわかります。国際的に見ても、日本の男性の家事育児時間の少なさが目立ちます。共働きかどうかによって違うのではないか？と思われるかもしれませんが、残念ながら、妻が有業でもこの状況は変わりません（図1―5）。

ワンオペもアウェイ育児同様、最近の現象ではなく、都市的生活への変化のなかで生まれたものです。高度経済成長に伴う経済力の向上は賃金の上昇をもたらし、夫の給与だけで家族が暮らせるようになったことによって、女性は結婚や出産を機に退職し、いわゆる専業主婦が一般的となりました。家庭に入った女性は、主に重工業が職場であった男性を支える役割を期待され、男性は長時間労働と住居の郊外化に伴う通

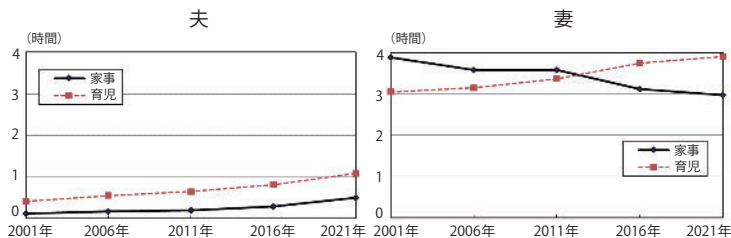


図1―4 6歳未満の子どもを持つ夫・妻の家事時間及び育児時間の推移(2001年～2021年)

(出典：令和3年社会生活基本調査（総務省統計局）)

～<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2021/pdf/gaiyoua.pdf>



1 章

子育てはひとりではできない

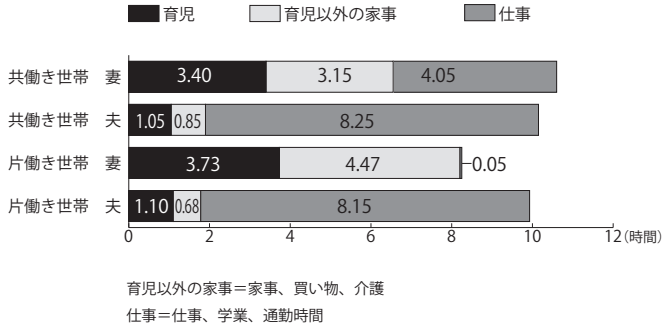


図 1-5 6 歳未満の子供をもつ夫婦の育児・家事関連時間（共働きか否か）
（出典：令和 3 年社会生活基本調査（総務省統計局））

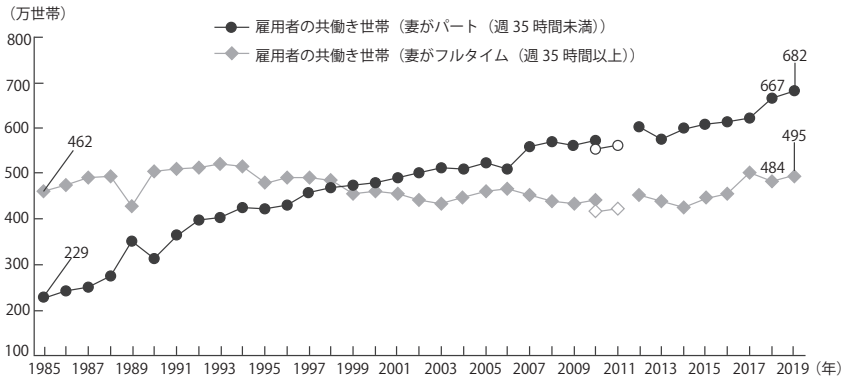


図 1-6 妻の就業時間別共働き世帯数の推移
（出典：男女共同参画白書 令和 2 年版～https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r02/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-12.htm）

勤時間の増加により家庭にいる時間が減少、女性に子育ての負担が偏るようになります。ただ、働く男性と無職の妻からなる専業主婦世帯が多かったのは1980年代で、1990年代後半には共働き世帯の数が逆転。共働きといっても、妻がフルタイムで働いている世帯の割合は横ばいで、パートタイムで働く妻が増えています（図1―6）。妻が働きに出たからといって男女の役割が変わりはなく、女性は仕事と家事育児を担ってきました。

イクメンもこの状況から生まれたものです。イクメンとは「子育てする男性」の意味で、厚生労働省の「イクメンプロジェクト」が始まった2010年ころから広く使われるようになりました。この言葉の存在自体が、男性が育児に不参加であった、もしくは現在も参加していないことを示しています。2020年の男性の育児休業の取得率は12・65%。はじめて10%を超えましたが、女性の81・6%に比べるとまだまだ少ないと言わざるを得ません。休業期間を見てみると、女性は約9割が6か月以上取得しているのに対して、男性の約8割は1か月未満で、うち半数は5日未満。取らないよりはマシですが、取得率だけ上がればいいものでもなさそうです。男性の家事育児時間が増えない背景のひとつに、育児期の男性の労働時間の長さがあります。ベネッセ教育総合研究所が行った調査¹⁷では、乳幼児をもつ父親の約4割が21時以降に帰宅している実態が明らかになりました。さらに、20時以前に帰宅する父親と、21時以降に帰宅する父親の育児行動を比較してみると、「寝かしつけ」「お風呂に入る」「遊ぶ」「叱ったりほめたりする」といった日常的なかかわりに大きな差がみられました。働き方を見直すことがまず必要です。

17 『乳幼児の父親についての調査』ベネッセ教育総合研究所
2014年

《理論編》 2 章

地域に遊び場がなくなった

菅野幸恵

外遊びをしなくなった!?

遊び場はどう変わったか

遊び環境の変化が、遊びの意欲を低下させる

「お客様」になった子ども

社会がアソビを失った

多文化が生み出す安心安全の過剰、管理

子どもや社会への信頼の喪失

子どもの危うさを許容できなくなった地域

子どものところとからだに起こっている変化

危機的状況だからこそ遊びの機会を



外遊びをしなくなった!?

みなさんは子どものころ、どこで、だれと、どんな遊びをしていましたか。

2021年に行われた調査¹では、週のうちのどのくらい外遊びをしていたかを尋ねました。

回想ではありますが、年齢が上がるほど頻繁に外遊びをしていたことがわかります(図2-1)。

また遊ぶ場所については、年齢が高いほど原っぱや川・池などの自然の場所が多いのに比べ、年齢が低い世代では公園や友だちの家が多いです。授業のなかで、似たようなことを学生に尋ねると、小学校に上がる前に遊んでいた場所として挙げられるのは、公園と家が突出して高くなります。誰と遊んでいたのかを尋ねると、同年齢の友だちという回答が最も多く、ついできょうだいです。

子どもたちの遊びに変化が生じていることが指摘されるようになったのは、都市化が進行した1960年代ころからでした。よく言われるのが三間の喪失。三間とは「空間」「時間」「仲間」のことです。遊びに必要な3つの間が失われているのではないかというのです。

外遊びの時間が減った分、子どもたちは何をしているのでしょうか。別の調査²では、年齢が上がるほど外遊びの時間が減少。3歳児の3割程度が、平日幼稚園や保育園以外で外遊びをしないことが報告されています。その代

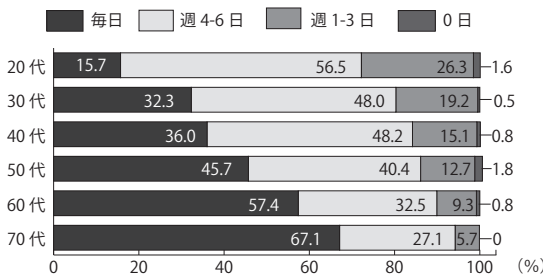


図2-1 週のうちのどのくらい外遊びをしていたか
(出典:『子ども時代の遊びと地域との関わりに関する調査』
2021年~<https://sites.google.com/view/cosodachi/%E8%A4%BF%E6%9F%BBsurvey?authuser=0>)

1 木下勇が中心となって2021年3月~6月にかけて『子ども時代の遊びと地域の関わりに関する調査』がオンラインにて行われた。回答者は18歳から70代までの2,287人。
<https://sites.google.com/view/cosodachi/%E8%A4%BF%E6%9F%BBsurvey?authuser=0>



わりに増えているのが、テレビやDVDの視聴時間で、1歳児から1時間以上という回答が多くなります。スマートフォンの使用率については、1歳児でも30分以上の使用が1割超（図2-2（図2-4））。さらに、ある調査³では、4歳以降で習い事をしている子どもの数が多くなり、5、6歳になると約7割の子どもが習い事をしていることが明らかになりました。0歳代から習い事を始めるなど低年齢化も進んでいるようです。

遊び場はどう変わったか

先行研究⁴を参考に、戦後の子どもの遊びがどのように変化したのかを表2-1にまとめました。第1の変化は都市化が進んだ高度経済成長期と重なります。第2の変化は、1980年ころからです。第1の変化は主に数量的なものであり、第2の変化は質的な変化が大きい⁵と指摘されています。第3の変化はバブル経済崩壊以降です⁶。

高度経済成長期以前から、子どもの遊び場は原っぱ（空き地）や道路でした。原っぱや道路は子どもたちにとってたまり場であり、ガキ大将を中心とした異年齢の集団が、かくれんぼや鬼ごっこ、缶けり、ボール遊び、などに興じていたのです⁷。仲間集団での遊びのなかで、子どもは大人になるために必要な社会的能力を身につけていました。その集団は子ども同士という対等な関係をもちながら年長者と年少者という上下関係も含むものでした。こうして、年長の子どもから年少の子どもへ遊び文化が継承されていたのです。また小さい子どもは「みそっかす⁸」と呼ばれ、鬼ごっこで鬼を免除されるなど特別な配慮を受けていました。第1の変化

2 東京大学大学院教育学研究科附属発達育実践政策学センター（e-cs）とベネッセ教育総合研究所が行った2016年が行われている縦断研究。2016年度に生まれた子どもを持つ保護者を対象に年1回調査を実施。全国約3,205世帯が参加（初年度）。

3 ベネッセ教育総合研究所『第5回幼児の生活アンケート』2016年

4 『子どもとあそび』仙田満、岩波書店『子どもを育む環境 読む環境』仙田満（朝日新聞出版）『子どもとあそび』多世代交流空間（中井孝章（大阪公立大学共同出版会）

5 『子どもとあそび』175頁

6 第4の変化があるとしたらコロナ後が考えられますが、実際どのような影響があるのかはもう少し時間をおいてでないと考察できないと思います。

7 『子どもとあそび』多世代交流空間（中井孝章（大阪公立大学共同出版会）11頁

8 地域によって言い方が異なります。

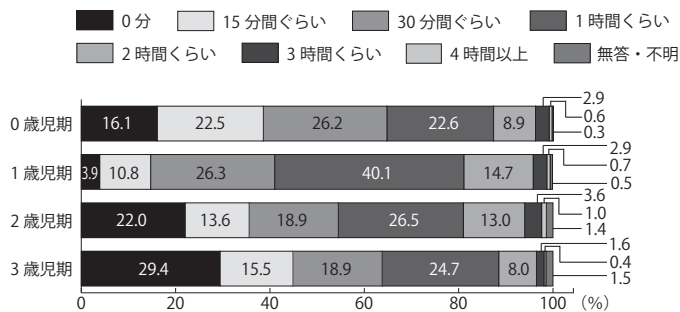


図 2-2 幼児の外遊び時間

(出典：東京大学Cedep・ベネッセ教育総合研究所 共同研究『乳幼児の生活と育ちに関する調査』2017-2020年)

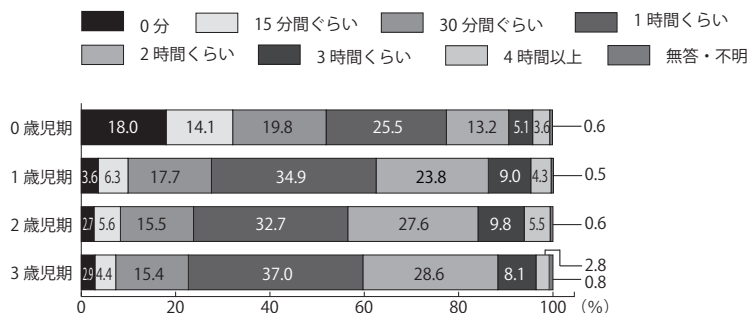


図 2-3 幼児のテレビDVD視聴時間

(出典：東京大学Cedep・ベネッセ教育総合研究所 共同研究『乳幼児の生活と育ちに関する調査』2017-2020年)

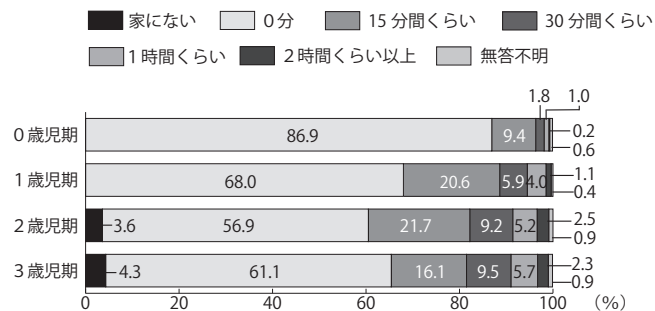


図 2-4 幼児のスマートフォン使用時間

(出典：東京大学Cedep・ベネッセ教育総合研究所 共同研究『乳幼児の生活と育ちに関する調査』2017-2020年)



では、このような場が、まず縮小していきます。

1980年代になると、質的な変化がおきます。原っぱや道路から子どもたちは追いやられ、家のなかでテレビを観たり、ゲームをしたりすることが多くなりました。作家の赤坂真理さん⁹は、「高度経済成長期とは、人が私有を追求するために共有をなくしていった過程」であったと言います。子どもに即して言えば、遊び場を失った一方で、多くの子どもが個室を持ち、自分のゲームをもつようになった時代であると言えるでしょう。さらに赤坂さんは過渡期を象徴する漫画として『ドラえもん』¹⁰を取り上げ、ジャイアンは、ガキ大将になりたくてもなれなかった男の子だと指摘します。ガキ大将が存在していた時代、子どもたちは原っぱや道路で自由に遊ぶことができました。ガキ大将の役割は、遊びの現場を取り仕切ること。異年齢集団の仲間関係を調整したり、時には別の集団との交渉（ケンカ）を行ったりなどです。『ドラえもん』にも空き地が登場しますが、そこに集まる仲間、みな同年齢で、敵対する集団もありません¹¹。共通の目的と、それを実現する場所がなくなると、ガキ大将の存在意義が失われていきます¹²。そこにジャイアンがガキ大将になれなかった理由があるのではないのでしょうか。

1990年代以降の第3の変化として押さえておくべきことは、インターネットの普及です。ゲームもオンライン化し、子どもの遊び場が現実世界から、仮想空間に移っていきました。もうひとつは、リーマンショック以降に始まり、コロナ禍で顕在化した、経済格差の問題です。日本の子どもの貧困率は1980年代から上昇し、OECD加盟国のなかでも最悪の水準にあり、厚生労働省の調査¹³では、13・5%の子どもが相対的貧困¹⁴状態にあると明らかになっています。7人に1人が貧困状態にあるのです。経済格差が子どもの遊びに与える影響は否定できません。

ます。ごまめ、おみそなど配慮という聞こえはいいですが、年少の子どもがいてもおもしろく遊ぶために子どもたちが編み出したしくみというほうが適切かもしれません。ただ小さい子も同じ場を共有していたことは重要です。

9 『愛と暴力の戦後とその後』赤坂真理（講談社） 98頁

10 1969年連載開始

11 興味深いことに、映画版ドラえもん¹⁵のジャイアンはガキ大将のふるまいをして、ときにそれがみんなをまとめたり、解決につながる力となります。それはみんなで成し遂げる共通の目的があるからではないかと思えます。漫画やアニメでは、そのような目的がないため、ガキ大将のふるまいをしても傍若無人に映ってしまいます。

12 赤坂さんは『ドラえもん』に登場する象徴的な場所として、土管のある空き地とのび太の勉強部屋を挙げます。共有と私有の両方を描いたことに過渡期を象徴する理由があります。

表 2-1 遊びの変化

| | 第 1 の変化 1960-70 | 第 2 の変化 1980-1990 | 第 3 の変化 1990年 - |
|-------|--|---|--|
| あそび空間 | 縮小。1955年ごろにくらべ75年ころには都市部で1/20、郊外部で1/10。道が遊び場でなくなる | 1975年に比べて1/2。小さく機能分化している。公園が唯一の遊び空間に | さらに減少 子どもへの犯罪報道により、公園の利用率が低下 遊び場の管理化が進む |
| あそび時間 | 縮小化。1965年ころに内あそび時間が外あそび時間より長くなった（それまでは外あそび時間＞内あそび） | 内あそびが外あそび時間の4倍に（1990年） あそび時間の分断化 | 内あそびと外あそび時間の差がさらに増大 |
| あそび方法 | テレビの影響大 ＊1953年テレビ放映開始 1965年90％の家庭にテレビ | ファミコン・テレビゲームの影響大 ＊1983年ファミリーコンピュータ（ファミコン）発売 | スマートフォン、インターネットの影響大 |
| 子ども部屋 | 個室化が進行 | 完全個室化 | 完全個室化 |
| 子どもの数 | 少子化傾向はそれほど顕著ではない | 少子化が進行 都市部での児童数は1975年ころの1/2 | 少子化がさらに進行（合計特殊出生率は2005年に過去最低の1.25を記録した後、上昇傾向だったが、再び低下傾向） |
| 親の世代 | 戦中・戦後世代 | 戦無世代 | 戦無世代 |
| 都市と田園 | 子どものあそび環境の悪化は、まだ都市部だけで、田舎では昔ながらのあそびがあった | 子どものあそび環境の変化が地方小都市、田園地域までおよび、田舎の方が都市部よりも遊び環境が貧しくなった | 左記の傾向が続く |
| 経済 | 高度成長期 | 安定～バブル経済 | バブル崩壊～リーマンショック・・・によって格差拡大 |
| 住宅 | 和式の住宅が多い | 洋式化 | 洋式化定着 |
| あそび集団 | ガキ大将集団から同学年同年齢集団に移行 | 集団の縮小、同学年同年齢化 | 同学年同年齢集団も解体へ |

（出典：仙田満『子どもとあそび』（岩波書店）p 174の表をベースに、第3の変化を加筆）



遊び環境の変化が、遊びの意欲を低下させる

遊び環境の変化は、子どもにどのようなことをもたらすのでしょうか。建築家の立場から子どもの遊び環境の研究が続けている仙田満さんは、遊び環境の悪化の循環を図2-6に示しました。遊ぶ時間が減ると、複雑な遊びができなくなり、遊びの方法が単純化。熱中する機会が少なくなります。遊ぶ場所が少なくなると子どもが集まりにくくなり、遊びの集団が小さくなったり、なくなったりするのです。すると、年長の子どもから年少の子どもへ、遊び方を伝えることもできなくなります。この図で重要なのは、これらの結果、遊びの意欲が喪われるということです。

「お客様」になった子ども

前出の浜田寿美男さんは、自身の子どもころの記憶は何より「働く」ことだった¹⁵と言います。1947年生まれの浜田さんの子ども時代は遊び環境が大きく変わる以前のこと。ただ

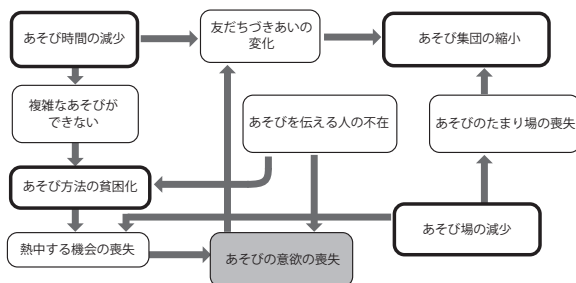


図2-5 あそび環境の悪化の循環

(出典：仙田満『子どもとあそび—環境建築家の眼—』(岩波書店) 1992を改変)

13 令和元年国民生活基礎調査
14 相対的貧困とは、その国や地域の水準の中で比較して、大多数よりも貧しい状態のことを指しています。厚生労働省の発表する相対的貧困率とは、世帯所得が全世帯の中央値の半分未満である人の比率を示しています。一方絶対的貧困とは、国・地域の生活レベルとは無関係に、生きるうえで必要最低限の生活水準が満たされていない状態を示します。

15 『心理学をめぐる私の時代史』
浜田寿美男(ミネルヴァ書房)
2頁